

あの戦争を語り継ぐ  
平和宣言都市  
30周年記念連載④

今野幸子さん 78歳

大山口地区在住

幼い頃の戦争の記憶

ように空襲警報のサイレンと放  
送が鳴り、慌てて帰り支度をし  
て走って家へ帰りました。空襲  
警報のサイレンは子供心にもと  
ても恐ろしく聞こえました。

終戦後の無い無い尽くしの生  
活、食糧事情の悪さは今では考  
えられないくらいです。全て

私は小学校2年生の夏に終  
戦を迎えました。当時疎開する  
までは、国鉄（日本国有鉄道の  
略称で昭和62年に民営化）の木  
更津駅で助役をしていた父の仕  
事の都合で、木更津に一家6  
人で生活していました。小学校  
までは子どもで30分はか  
かったと思います。ランドセル

が配給で、お米はほとんどな  
く、母の着物をお金に換えて闇  
米（ひそかに取り引きされた米）  
を買っていました。母は体の弱  
い人で、闇米を買いに行くとき  
は痩せた体に重い籠を背負って、  
いつも私を連れて行きましたが、  
い毛が嫌いでした。

を背負い、白地の木綿で作った  
粗末な救急袋、母の手製の防空  
頭巾をたすき掛けにして登校し  
ていました。終戦の年は毎日の

道中、橋の欄干にもたれて休ん  
でいる様子を見ると「お母さん  
が死んじゃう」と子供心にも思  
いました。配給の小麦は「ふす  
ま」というかす混じりのもので、

それですいとんを作りましたが、  
だしもなく具は菜っ葉だけでの  
み込むのも大変でした。あると  
き私が「すいとんはいらない  
つゆだけでよ」と言ったとき、  
父が「かわいそうに」とつぶや  
いたことを覚えています。あと  
代用食として「沖繩」という品  
種のスツマイモをよく食べてい  
ましたが、今のスツマイモと違  
い水っぽくて甘くありませんで  
した。あまりに食べさせられた  
ので嫌になってしまい、大人に  
なってからもしばらくはスツマ  
イモが嫌いでした。

◆すいとん 小麦粉の団子を汗  
で煮たもの。戦後の食糧難の時  
代には主食として食べられた。  
■ 企画政策課男女共同参画室  
内線 3354